『神々の代理戦争』

第一章　神々の与えた条件

一

東京の街に続いた寒い冬が終わり、春の足音が忍び寄っていた。その季節感とは裏腹に、東京第二地検特捜部の部長である東義彦（あずまよしひこ）の顔色は曇っていた。

東は地検の部長室に一人でいた。その東が、机の上にある電話機の受話器をフックに戻したのは、今しがたであった。東の細められた目が、電話機のそばに置かれた緑色の封筒に移った。その封筒をじっと睨んだ東が呟くようにいった。

「神々の代理戦争とは馬鹿げた話しだ……」

東は両手を、机の上で組んだまま封筒を見つめ考えていた。封筒のそばにはメモがあっ

た。そのメモは電話をかけてきた女からいわれるままに、東が書き留めたものであった。メモの内容は頭に入っている。メモを読むわけではなかったが自然と東の目は、そのメモに注がれていた。

――アジア資源調達機構の不正経理を調べれば、政治家が浮かんでくる。

女はたしかに、そういった。女の情報が正しいものであれば、アジア資源調達機構と政治家の絡む汚職事件に発展する。それも大物政治家が複数、絡んだ大きな事件になる。女の言葉を東は何度も頭の中で繰りかえしていた。

東京地検にいても、政治家を対象とする案件に、携われる事は滅多にない。地検特捜にいるからには、政治絡みの事件を扱いたいのは、特捜検事の誰しもが持つ願望であった。

女の話が事実であれば、東にとっても、またとない大きなチャンスになる。その一方で、東を不安が襲っていた。相手は、東自身の過去も調べていた。それは東にすれば、歓迎できる話しではない。それだけに油断のならない女だと思った。

二

警視庁に勤める高木憲久（たかぎのりひさ）は、友人である西原基樹（さいばらもとき）から呼び出された。時間は夜の十一時を回っていた。少し遅れたと思いながら暖かくなりだした夜の街を、西原が告げてきた幸町にあるバーへと急いでいた。

高木を誘った西原は、政権与党である政輪党の重鎮、斉藤努代議士の秘書をしている男であった。もともと、高木と西原は同じ大学に通っていた。だからといって親しいのかといえば、それも良くわからない。大学時代でも、それほど親しい付き合いがあった訳ではない。ただ、西原が斉藤代議士の秘書になってからは、代議士事務所と警視庁が近い事もあって時折、二人で酒を飲んだりはしている。高木にしても西原にしても、お互い仕事柄、自分の仕事の内容をぺらぺらと話せるような職業ではない。そのために気晴らしとなる無駄話などをするには、どちらにとっても都合が良い存在であったのかも知れない。

高木は西原が伝えてきたバーを見つけた。高木の知らない店であった。店内はさほど広くはなかった。カウンター席には丸い椅子が六脚が並び、フロアーには四名用テーブル席が三つあった。

西原は奥のテーブル席に一人、座って酒を飲んでいた。週の初めである為か客は、西原

の他にはカウンター席に、二人連れの年輩の男がいるだけであった。
西原は店に入って来た長身の高木に気付くと、軽く片手をあげた。高木は、それに答えるように頷き、そのまま店の奥に進み西原の前に座った。
カウンター内に並ぶグラスや酒瓶が、間接照明の薄明かりによってほのかに浮かび上がる。テーブルや椅子などの調度品は、相当良い物が使われているように見えた。派手でないが、重厚な趣のあるバーだと高木は思った。
高木は西原と同じウイスキーを注文した。
グラスを口にしている西原は中肉中背で、平凡な顔付きをした男であるが、秘書という人に接する仕事柄であるのか、頭髪は綺麗に揃え、着こなしもなかなか堂に入っている。
しばらく雑談があった。酒が進むと西原が、声を低くしていった。
「なあ、高木、お前は警視庁にいるんだよな」
西原が、このような言い方をするのは珍しかった。仕事内容を聞くのは、お互い野暮との暗黙の了解があるような二人である。まして、高木が警視庁にいるのは西原も承知している。何か相談でもあるのかと、高木は西原をみた。

高木の目を見た西原も、当然だよなと言いたげに、高木の言葉を待たずに自ら頷き話しを続けた。
「神々の代理戦争なる話しを聞いた事はないか？」
「何だ、それは？」
まるでゲームのタイトルでも思わせる言葉に、高木の目が少し細められた。
高木憲久。短くした頭髪や、その目の鋭さなどから、よく見ると普通の会社員とは少し異なる雰囲気を持っている。店に入ってきてからも、ほどんと表情を変えるでもなかった。何処かさめた感じを漂わす男であった。
「知らないのなら構わない」と慌てて西原が打つ消すようにいった。
「話し始めたのだから言えよ」
「そうだな、……仲間内のある先生の話しだ」
西原は、少し口元を噛みしめ、そのように断ったうえで話し始めた。
「その先生の話しによると、緑の封筒が事務所に届き、神々の代理戦争の指名を受けたと、書かれた手紙が添えられていたそうだ」

西原は、ある先生とはいったが、政治家秘書が、このように話す場合は、得てして本人が仕える政治家先生の話になる。となれば斉藤代議士に起きたものだろうとの想像は、高木にもできる。

「何か代議士を脅すような事が、書かれていたのか？」

「いや、封筒には携帯電話が入っていたらしい」

「それで連絡は？」

「女が、その携帯に電話してきた。女の話では指名を受けた九十八人は、お互いに戦わないと駄目だそうだ」

「物騒だな、戦うとは殺し合いでもしろと言っているのか？」

「それは判らん、神さんのしもべと称する、その女の話しだと処分という言葉を使ってきた」

「神さんのしもべ？　また、けったいなものを持ち出したな」

余り表情を表に出さない高木にしては珍しく、少し呆れた顔で聞き返した。

「女が、そう話したというのだから仕方あるまい」

「それはそうかも知れんが、――それで、その女とは会ったのか？」
「いや電話だけだ」
「金品の要求とか、何か脅される。本当に、そのような事はないのか？」
「ない、はっきりと女はゲームだと言った」
「ゲームね、ゲームか……」
西原にしても代議士に関わる問題である。仮に、そこに不都合があっても話せないのは、高木にもわかっていた。しかし、ゲームと言われたのでは高木にしても、それ以上、突っ込んだ話しも聞けなかった。
「その先生も悪戯だろうと話していた。おそらく、そうだと俺も思った。ただ、お前は警察にいる。何処かで、そのような噂を耳にしてないかと思ったので聞いた」
「……緑の封筒が送られた事件など知らない。神々の代理戦争なる言葉も聞いた事がない」
ぶっきらぼうな言い方ではあったが、事実、高木はそのような噂に触れた記憶はない。
「それなら、それで構わない。ただ、少し調べられないか？」

「被害届けは出せないのか？」
正式なルートでの相談であれば、応じようもある。しかし、幾ら友人の頼みとあっても、被害届もでてないのに、勝手に警察が代議士の近辺を、洗ったりするのはできない。
「出すほどのものじゃ、ないだろう」
「それじゃ駄目だ。こっちだって政治家先生の身辺をうろつき、おかしな事になれば警察組織に跳ね返ってくる」
「それはわかっている」
高木は「取りあえず警察に、その様な情報があるかは調べてみる。それで良いか？」と、問うた。代議士が関わる問題だけに、高木としても深入りは避けたかった。できるのも、そこまでであった。
西原も、それで良いと答えた。

三

四月十六日、三寒四温とは、まさに、この日にあるような言葉であった。数日続いた暖

かい日も今日は、昼間から一転して寒さが戻っていた。それは夜になってもかわらなかった。

寒いというよりも冷たいのであった。そんな冷たい夜に、警視庁公安部の大畑は、ある男と会うために日比谷公園へと向かっていた。

公園内に入るとベンチに座る男女や手を繋ぎ歩く、若い男女の姿などがある。何か、そこだけは寒さとは関係のない、やはり春先なんだなと思わせるものがあった。

大畑は、こっちはこれから大仕事だというのに、世の中は暢気なものだと、行き交う若いカップルを横目で見ながら、それでも人目を避けるように、公園内の隅にある日比谷野外大音楽堂に向かった。

公園奥にある夜の野外音楽堂。さすがに、この付近ともなると人影はなかった。

音楽堂の正面は二千人から収容のできる長椅子型の観客席が扇状に設けられており、最後部は立ち見席のスペースとなっている。その周囲は木々に覆われている。

大畑が観客席に近い道路から音楽堂に近づくと、一人の男が立ち見席から、正面の音楽堂の方を見ている姿が目に入った。大畑は、遠目から男の横顔を確認した。間違いないと

思った。
大畑は男に近づいた。それに男も気付いた。男は用心のためか、街路灯の光の届かない木々の影に向かって歩いた。大畑も男に従った。
光が僅かに漏れている、薄暗い木の陰で大畑が男に話しかけた。
「持ってきて貰いましたか？」
「ああ、メモリに全てコピーしてある」
男は、そう言うと胸元のポケットを探りメモリカードを取り出し、それを大畑に手渡した。
大畑は渡されたメモリカードに目を落とした。その瞬間であった。大畑の胸に鋭い痛みが走った。ウッともグッともつかない小さな声が大畑の口から漏れると、大畑の体は太い幹に持たれかかるように崩れていった。
翌早朝、散歩で訪れた近くの住民によって、大畑の遺体は発見された。

四

警察官が公園内で殺害されたとの報道があった数日後に、今度は世田谷で会社役員が殺される事件が起きた。

休日の朝だった。遅い朝食を済ました神坂順平はアパートの自分の部屋で、配達された新聞に目を通していた。順平の大きな目が新聞の一カ所に止まると、そこから動かなくなった。

順平の口から「嘘だろう」と、独り言が小さく漏れた。

新聞には、東京で起きた殺人事件が報じられていた。殺されたのは会役員、黄田真一となっている。

順平の表情がにわかに曇りだした。順平は立ち上がると、部屋の隅に積んだ新聞の束から、数日前に警察官の殺害事件を報じた新聞を探した。順平は警察官殺害事件の載った新聞と、会社員の殺された新聞を交互に見ながら、険しい表情のまま、あの女の話しは嘘ではなかったと思った。

神坂順平は茨城県に住む、今年二十九歳になる平凡な会社員をしている男である。周囲からは余り物事に拘らない、何処かひょうひょうとした性格のように見られていた。

おそらく、その見方は、それほど間違ったものではないのであろう。彼自身、出世欲とか人との競争などといったものには疎い性格をしていた。信条というほどのものではないにしても、順平は無理せずに人並みの生活ができれば、それで良いとの考えがあった。事実、彼は、それなりの大学も出ていたが都会で就職をするのを嫌い、卒業すると生まれた地元に戻って、小さな会社に勤めだしていた。

競争社会に身を投じなかった彼の弁解をする訳ではないが、そこには順平の生まれた土地柄が影響をしていたのかも知れない。

順平が生まれたのは茨城県小美玉市（おみたまし）である。茨城県に近い他県の人で小美玉市を知る人は少ないだろう。ただ、ある時期新聞などでも九十八番目の地方空港が作られたと大きく報じられたので、茨城空港のある町と言えば、そうかと思い当たる人も居るかも知れない。

小美玉市は自衛隊基地や空港があっても長閑な町である。広陵とした関東平野にあって、目立つのは畑や田といった田園風景である。

順平は、そのような長閑な街で、わりと大きな農業を営む家の次男坊として生まれ育った。子供の頃から農作業の手伝いなどをしていたせいか、長身のために痩せているように

見えても、結構骨太のしっかりとした体はしている。自らも、体力や運動神経には自信があり、これまで大きな病気などもせずに育ってきた。

それらの生まれながらの環境が、せせこましい人との競争という考えを奪っていたのかも知れない。

大学を出ると地元に戻り会社員となったが、農村地帯にある会社である。それほど大きな会社に勤めた訳でもなかった。田舎の自然の中で生きようと地元に戻ったときから、人と比べても仕方ないとの気持ちは益々強まり、自分は自分との割きりのなかで、古くからの友人達に囲まれ、のんびりとこれまで生きてきた。

その順平に神からと称する、奇妙なやや大きめの緑の封筒が届いたのは一ヶ月ほど前であった。

順平は、その時の事を思い出していた。

その日、順平は会社の友人達と、近くの居酒屋で酒を飲んでいた。しばらくぶりの飲み会、まして明日は休日である。会社勤めをしている順平にしても、こんな楽しい日は、そ

うそうない。酒のピッチもあがっていった。場所を変え二次会をすると、後は解散。その後はお決まりのコースのように、気のあった男女七人の同僚達と近くのカラオケボックスで酔い冷ましを兼ねて歌っていた。

順平が気持ちよくアパートに帰ったのは、夜中の二時を少し回っていた。

アパートの部屋に戻った順平は、テーブルの上にある膨らんだ緑の封筒に気付いた。一瞬、あれと思った。部屋の様子を見回した。部屋の様子に変わったところは感じられなかった。

部屋に入る時に鍵はかかっていた。鍵穴に差し込んだ鍵が、カチッとロックを解除する感覚が酔いの残った頭にあった。少し小首を傾げながら順平は、緑の封筒を手にした。封筒には宛名も、差出人もなかった。順平は、酔いもさめやらない頭で、何だ、これはと思いながら封を切って、中の物を取り出した。

中には携帯電話機と手紙が入っていた。何だろうと思いながら、中の手紙を読み出した。

”神坂順平様　神々の代理戦争へようこそ

神からの訓告を致す。光栄にも君は神から九十八番目の戦士に選ばれた。これから三年

間は神の代理として頑張って貰いたい。なお、大会の詳細は神のしもべより聞いてくれたまえ。それでは健闘を祈る”

巫山戯けた短い文面が目に飛び込んできた。誰かの悪戯だとは思った。しかし、それよりもどうして、この部屋に、このような物が置かれていたのか、それが不思議であった。

順平は部屋の合い鍵を彼女に渡すとか、友人に渡すなどはしてない。他人が留守の間に勝手に部屋に侵入している。

普段は余り物怖じしない順平であったが、さすがに薄気味悪い思いに、訝(いぶか)しげな目で部屋の中を眺めた。部屋の中に変わった様子は感じられない。それでも順平は、ふらつく足で立ち上がると机やタンスを調べてみた。別に部屋から消えたものはなかった。

そのときであった。突然、封筒で送られてきた携帯電話が鳴った。静かな部屋に響く携帯の呼び出し音に一瞬、ドキリとしたが、順平は携帯電話を手にした。

「……もしもし、誰だ、お前は？」

「見て貰いましたか、招待状を」

柔らかな女の声が流れてきた。一瞬、順平は戸惑った。
「……」
「御免なさい、私は神様の使いね」
女はかろやかに話しかけてきた。響いてきた声からは若い女のようであると感じた。
「……手紙を置いたのは君か？」
「そうです」
「何のために」
「それは、これから話します」
「カミって何だ。代理戦争とは何だ」
おかしな話しをする相手に、順平は用心をしながら、少し口調を強めた。
「……落ち着きのない奴だな、どれから答えてよいか判らないだろう」
矢継ぎ早に質問をする順平に少しムッとしたのか、電話から伝わる女の口調が急にぞんざいになった。
「こんな夜中に、そう興奮しないでよ。本当に私は神の使いなんだから。最初に話します。

招待の御褒美として三千万、貴方の銀行口座に振り込んだわ。後で確認してね」
三千万と聞き、この女は、何をいってるのかと思った。
「誰が見ず知らずの人間に、そんな大金をくれる？」
「足りないか？　幾らなら良い。まだまだ、出すよ」
「あのな、そんな問題ではないだろう。つまらない冗談は言うなという事だ」
「これは冗談じゃないよ。それは命の金だよ。貴方の命を三千万で買ったのよ」
「……俺の命の値段、何なんだ、それは？」
「頭の悪い男だな、貴方は神様から選ばれた。それは貴方が、これから九十七人の相手と勝負をしないとならない。負ければ命を失うのですよ」
荒い言葉や丁重な言葉を、巧みに入り混ぜて話してくる。何なんだ、この女はと思いつつも酔いがそうさせたのか、あるいは勝手に部屋に置かれた封筒が気になったのか、女の馬鹿げた話しに、順平は電話を切れなかった。
「九十七人を相手にする、えらく中途半端な数だな。手紙に九十八番と書かれていた。そうなると俺は最後に選ばれたのか？」

「そうだよ」
「何で、俺はビリなんだ」
「それはですね、それは……」
「何を言いよどんでいる？」
「基本、沖縄の神様は人が良いのです」
「訳が判らない。何故、沖縄の神様が突然でてくる」
「妾（わらわ）は、ニライカナイ様に仕えるしもべなり」
「何だ、そのニライ何とかとは？」
「たわけ者が、汝はニライカナイ様より御指名を受けながら、そのお方を知らないのか？」
「だから、そのニライさんは、なんだと聞いている」
「……沖縄では偉い神様なんだけどな」
「俺は茨城の生まれだ。沖縄の神様に親戚はいない。選ばれる理由がない」
「理由ならあるぞ。尤もな理由が」

「どんな理由だ」
「つまり、お前を選んだ神様の指名順位が九十八番目であった。神様も下々の事を知らないとならない。そこに飛び込んできたのが茨城空港の開港、それが国内九十八番目。神様いわく、茨城の地から代表を出すと、お決めになった」
「そんなチャラいものか、いや、まだ判らない、そこから何故、俺になった」
「沖縄の神様は、物事をごちゃごちゃと考えるお方ではない。だから、順平の名字に神の一文字があるのを見て、これは良いと指をさし、お前が決まったのだ」
「あのな、その何処が尤もな理由なんだ。それは単なる行き当たりばったりだろう」
全く人を馬鹿にしたような話しである。人を信用させるなら、もう少し上手い嘘をつけと言いたかったが、一方では女の巧みな話術につい引き込まれてく自分を感じていた。
「いや、その閃きは、すこぶる合理的な考えだと、お前は思わないか？」
「思えるわけないだろう。だいたい沖縄の神様の指名順位が最後だった理由はなんだ」
「それはだな、その神様にも色々とあってな、何だかんだと言っても本州の神様の数が一番多いからな」

「数が多いのと指名順位は違うだろう」
「その、なあ、太古から日本の神様には三つの派閥がある。その最大が本州、北海道には北方先住民の文化、沖縄は琉球文化があり、それぞれに神様が居る」
「それは地域格差というやつだな」
「いや、いや、神様に格差は存在しない。だけど、神様も集団である以上、序列は決めないとならない。その序列を決めるのが、この代理戦争になる。沖縄の神様が最後であったのはだな、北海道の神様も沖縄の神様も、底抜けに人が良いから、ついつい本州の神様の言葉に言い負かされた。今回も、それで後回しになった。あげく北海道の神様と沖縄の神様でジャンケンをした。結局、それにも沖縄の神様は負けた結果だ」
　女の口は滑らかに回る。いつのまにか、その巧みな話術に順平は引き込まれていた。
「ただな、九十八番でも神様から順平が選ばれたのは奇跡だ。それは間違いない」
「奇跡？　どうして」
「本当に頭の悪い奴やな」
「何度も頭が悪いと言うな。俺にだって多少のプライドはある」

「そうか、それならはっきり言う。だいたい神様に変わって戦う人間を選んでいる。神様達は、指名順位の早い方から、この国のトップレベルの人間を指名するに決まっているだろう」
「すると俺も、日本の中では九十八番目に偉いのか？」
「だからお前は馬鹿だというんだ。余り言いたくはないが、沖縄の神様は一風変わっている。何せ茨城空港が出来たのを祝い、茨城の地から人を選ぶのを思いつく程のお方だからな」
「それがおかしい。茨城空港が出来たのは随分昔だ。今更、お祝いもないだろうに」
「これ、これ、滅多（めった）な事を言うでない。何十年経とうが神様が祝いたいと言ったのだ。その何が悪い。それに対して下々が文句を述べるなどは神様に対する冒涜（ぼうとく）意外のなにものでもないぞ」
「……お前の話を聞いていると頭が痛くなる。まあ、一風変わった神様が俺を選んだ。それは、それで構わない。しかし、何故、人が神様に変わって闘わないとならない」
「昔は神様が直接、闘って序列を決めていたが、神様はどの神様も強いから何百年も戦わ

ないと決着がつかない。そのうちに戦うのに飽きてしまう神様もいた。それでは困るから人間に代理をさせようとなった」
「いい迷惑だな」
「そう言うな、神様が決めたのだ。――一応、ルールを話すぞ。期間は三年間、その間に相手の自由を奪えば、奪った人間のポイントとなる。ポイントが最高の者が優勝者。極めて簡単なゲームだ」
「自由を奪うとは何だ？」
「相手を殺せば、自由は奪える」
「まて、これは人殺しのゲームか？」
「いや、違う神様の序列を決める大会だよ」
「人を殺せと言っている」
「どのように解釈しようが、構わんが、これはあくまで神様の序列を決めるものだ」
「……そんな話し、誰が信用する」
「そう、そうよね。皆、最初はそう言うよ。いきなりでは可哀想だね。それじゃ、まず明

日は、銀行口座を調べてきてね」
「何を言っている」
「今日は、ここまでにしておいてあげる」
そう言うと女は電話を切っていた。
――新手の詐欺。順平は送られてきた携帯電話を握りしめ、そのような考えが浮かんでいた。

五

翌朝、順平はベットの中で目覚めた。昨夜は酒に酔っていた。おかしな夢を見たと思った。ベットの上から眠たげの眼をテーブルに向けると、そこには緑の封筒と携帯電話があった。順平は目を細めてしばらく眺めていた。
夢ではなかったと口元を噛みしめた順平は、のろのろと着替えを済ませるとベットの縁に腰を下ろし、昨夜の女との会話を思い返していた。時間を見た。九時になろうとしていた。順平は外にでると近くの銀行に入り、ＡＴＭを操作して預金口座の残高を調べてみた。

表示された残高に順平は驚いた。すぐには金額が判らなかった。しかし、そこにはゼロが七つ位ついた金額が表示されている。何度か見直してみたが、一度表示された桁が変わるものではなかった。

これは何だと思った。やはり最初に浮かぶのは新手の詐欺ではないのかという考えであった。――いい気になって使ったら、後から莫大な請求がくる。しかし、よく考えると駄目であった。契約書がない。何も契約をしてない。間違って振り込んだものだから返せでは、儲けなどは出せない。仮に、こっちが返金に応じなかったら相手は損をするだけ。勿論、金を持って逃げられても相手の損。これだけ大きな金額を振り込むのは、相手に取っては余りにも大きなリスクであった。

わからない。何が何だかわからない。――俺の口座番号はどうして知った。それもおかしい。ただ、女の話しは嘘ではなかった。

気味が悪い、それが、その時の正直な順平の気持ちであった。

順平は、残高証を握りしめ部屋へと戻った。部屋で座り込むと、再び、昨晩の女との会話を考えた。

そのとき昨日送られてきた携帯電話が鳴った。おそらく、また、神の使いと述べた女からだと思いながら、携帯電話を手にした。
「はい、順平、ペンとメモ紙を用意する」
電話にでると女は弾けたような明るい声で言った。言葉は雑だが透き通った綺麗な声であった。
「金が振り込まれていた。どうなっている！」
「だから言ったでしょう。それは自由に使って構わないと」
「巫山戯(ふざけ)るなよ！」
「おう、こわー」
「茶化すな！」
「それは順平の命の金、何度同じ事をいわせる。頭悪いな。お、ま、え、は」
「……」
順平の怒りなどは、全く無視であった。順平にすれば女から知られている立場。順平は相手を知らない。そこには最初から大きなハンディがあった。なんといっても状況的には、

圧倒的に女が有利に決まっていた。怒りが通じない相手となれば、カリカリしているのも虚しい。――こりゃ、駄目だなと諦めた。

「今から、お前と同じように神様から指名を受けた五人の名前を告げる。まあ、それが当面のお前の相手になる」

「……五人だけか？　九十七人居るのだろう」

「ゴチャゴチャ言わない。まずはメモを取る」

「……」

やはり、三千万という金の力は大きかった。悪戯ではとてもできるものではない。訳が判らないながらも、女に従うよりなかった。順平はペンとメモ紙を用意した。

「準備はできたか？　では告げる。聞き逃すなよ」

「まず国会議員から行くよ。はい、林田寛一朗」

「林田って、総理大臣の？」

「国会議員に、もう一人、林田寛一朗が居るのか？」

「居ないだろうな、……しかし、そんな馬鹿な」

順平の戸惑いなどにはお構いなく女は続けた。
「はい、次ぎ行くよ。同じ代議士、川上晋蔵、東京地検に行って東義彦。はい、警視庁高木憲久、最後は会社役員黄田真一（きだしんいち）、はい、今回は、この五人だよ」
「……この五人は、全員に知らせているのか？」
大きな金額が振り込まれているとなれば、順平としても女の話をむげにはできない。電話を受けながらも、自らの置かれた立場を知ろうと必死になっていた。
「鈍い男だな、林田君に林田君を知らせてどうする。それにそんな事したら、この五人だけが皆から狙われる。バラバラに教えている」
なるほどなと思った。今、知らされた五人とは、エントリーされた全ての人間が知る訳ではない。この五人は、あくまで自分に知らされた五人であって余所の人には、また違った五人の名前を教えているらしい。
酷いルールだと思った。狙う相手は教えても、狙ってくる相手は教えない。そうなるとエントリーされた人間は、自分が誰から襲われるかわからない中で、自分が知った五人だけを狙う以外にない。メモをした内容をみた。そこには代議士、警察、検事など相当たる

職業が名を連ねている。
「もう一度、聞く、これは悪い冗談か？」
「冗談で三千万払うか？　必要ならもっと出すとも言ったろう」
「金の問題じゃない。……しかし、これは余りに酷い、いや汚い」
「何が酷いのよ？」
「検察や警察が戦いの相手では、警察に駆け込む事もできない」
「ピンポン、そうよ。この仕組みから抜け出せなくするには、警察や検察も必要なのよ」
送られてきた招待状を見た。余計な事は何も書かれてない。これでは、この手紙を手に人を殺すゲームだと警察に駆け込んだところで、相手にはされないだろう。まして、その警察にも相手が潜んでいるとなれば、迂闊に警察にも行けない。
段々と大変な事に巻き込まれていると思うのであったが、今ひとつ順平はピントこなかった。それは女が気の抜けるような茶々や、合いの手を入れたりし、深刻に受け取れないような話し方をする為であるのか、それとも余りに馬鹿げた話しである為なのか、順平にもよくわからなかった。

「総理大臣は別として、他の人間も大物か？」
告げられた五人の事であった。
「超が付く大物だよ。ただ、それではお前が可哀想だから、今回はお前でも狙える小物も、少し混ぜたから安心しな」
「教えるのは職業と名前だけか？」
「基本は、そうだ、あとは勝手に君が調べる」
「調べられなかったら？」
「本気で相手を狙う気になったら、そのときは相談しな。年齢、住所くらいは教えてやるよ」
「……親切だな」
「当たり前だろう、このゲームは神様のものだよ。間違った相手を殺すような事があってはならない。世の中には同姓同名の者もいる」
「しかし、それって、俺の住所なども知られるんだろう」
「当然、そうなるわ」

「……親切と言ったのは取り消す。余計なお世話だろうに」
「くだくだ言わずに運命を受け入れ、相手を倒すのです。その為に身を隠す、人を雇う、武器を買う、資金は幾らでもありますから」
「待て、待て、そんな事より、もう俺も狙われているんだな？」
「いえ、貴方は、すこぶるラッキーです」
「ラッキー？」
「最後の指名だったから、今は誰にも貴方の名前は知られていません」
「どうして？」
「頭の悪い奴だな」
「こっちは訳が判らないのに、その言い方はないだろう」
「少し考えればわかるだろうに、いいか、指名を受けた順から、神の手紙は送られている。そのときに同時に相手の指名が伝えられる。しかし、最初に指名を受けた人間は、最初の一人なんだから、相手は、まだ存在してない。伝えようにも相手が居ない」
「神さんから指名をされた順に、連絡をしているのか？」

「そうだ、だから二番目に指名された人間は、最初の指名を受けた一人だけが知らされた。五番目の人間は、前の四人だけが知らされる」
「俺には五人の氏名が知らされている」
「六番目の人間からは全て五人の名前が告げられている。しかし、お前は最後の九十八人目に指名された。最後の指名の為、知らせる相手が居なくなった」
「なるほど、しかし、そうなると指名された最初の人間には知らせないのか？」
「ハンディだ、最初に選ばれる人間は強い人間、後から選ばれたお前が可哀想だろう」
たしかにハンディの意味なら、それもありかも知れない。総理大臣や代議士などの人種は、簡単に素人が狙える訳がない。
このときの順平にすれば、仔細（しさい）についてまで気にかける余裕はなかった。ともかく、まだ誰にも知らされてないと聞き安心が先立っていた。
「ラッキーでいいのかな、それで行くと、俺の名前は永久に出ない」
「おめでたい人間だ。それではゲームにはなるまい」
「しかし、ルール的に言えば、俺の名前は出ない」

「二ヶ月後には新たな五人の名前が知らされる。そのときは、お前の名前も、当然知られる」
「何だ、また、名前を教えてくるのか？」
「当たり前だろう。お前の名前が永久にわからないんじゃ、メチャメチャお前は有利になる」
「それでもいいと俺は、思うけどな」
「つべこべ言うな。その後も二ヶ月に一度、一年間は、全員に五名の名前を知らせる。一年経てば誰もが三十人の敵を知る」
時間の経過とともに敵の名前を知る。しかし、それは一年後には、自らも多くの人間から狙われるとの意味でもあった。
最後に選ばれた妙によって、名前が外にでないのは結局、最初の二ヶ月だけであった。
さすがに、そんなに甘くはないなと順平は唇を噛んだ。ただ、どんな理由であれ二ヶ月は、誰にも自分の事は知られないとなれば、多少なりともほっとするものがあった。
「ところで、お前の立場はなんなんだ」

この減らず口叩く女は、単なる説明員に過ぎないのか、それとも別の役割を持つのかであった。
「私ですか？　私はお前を選んだ神のしもべ、だから、お前に勝ってもらわないと困る立場。まあ、お前のアドバイサーかな」
アドバイザーにしては、何とも頼りない神のしもべだと思った。
「では君は、俺以外の神から指名を受けた者との接触はないと思って良いのだな」
「ありません。そんな事したら、余所の神様のしもべに叱られるわ」
他の指名をされた人間と、この女が自由に接触できたのでは、自分の情報が筒抜けになる。本当か、嘘かはわからないが、ともかく今は、女の話を信じるよりなかった。
「では、もう一度、確認する。次の名前が知らされるまでは、俺は安全なんだな」
「そうです。連絡は神さんの携帯電話を使い、私が五人の名前を知らせます。そのとき、貴方の名前も他の人に知られる時です」
「何で、携帯なんだ。文章でくれ」
「手紙は大変なんだよ」

「変わらないだろう」
「細かい事に拘る。お前の悪い癖だぞ。それと良く聞け。お前は神の御加護により有利な条件からのスタートとなった。それを活用しない手はない。これが私の最初のアドバイスだ。この期間を有効に使い相手を仕留めるのだ。わかったか？」
「神の御加護？　そんなものが本当にあるのか？」
「馬鹿な男だ、どうしても神様の存在を信じないのか？」
「そんなもの信用できる訳はないだろう」
「どうも、お前は疑り深い性格で救いようがない」
「……」
「それでは一つ、神の予知能力を見せてやる」
「予知能力？」
「そうだ。これは特別だぞ」
「……」
「お前に知らせた人間で最初の犠牲者は、会社役員の黄田真一だろうな。期間は、ここ一

ヶ月の間だ」
「黄田真一？」
「私の占いに出たから間違いはない」
「俺は殺さないぞ」
「誰がやるのか私は知らない。しかし、お前がやらなくても誰かにやられるのは確かだ。ただ、良く聞けよ。この男も、力の無い男だ。その意味ではお前と一緒だ。力が無かったら、この男のようになる。それを順平も肝に銘じておけ」
「それは脅しか？」
「アホか、妾が親切で教えているものを。仕方ないな。それなら、もう一つ教えてやる」
「何を」
「おそらく、黄田と同じ頃に東京で警察官が一人死ぬ。それも、この大会によって殺される運命にある男だ。総理大臣なんかも近々襲われる口だな」
「そんな馬鹿な！」
「また信用をしないのか？　本当に救いようのない男だ。それでは神の力をもう少し見せ

ましょうか？」
「神の力？」
「そう、いいか、この後に携帯電話の電源を切りなさい。そして携帯電話に向かい神のしもべ、九十八番と強く念じるのです」
「それで何が起こる」
「いいから言うとおりにしなさい」
順平は、女に言われるまま、携帯電話の電源を切ると神のしもべ九十八番と念じた。
「順平、聞こえるか、私だ」
順平は、はっとした。一瞬、自分の頭の中に、さっきの女の呼ぶ声が聞こえたと思った。
「順平、返事をしろ、聞こえているのだろう」
聞き間違いではない。手にした携帯電話を見た。電源は切れている。いや、間違いなく携帯電話からの声ではない。その声は確かに頭に響いてくる。
「……」
「妾はいつでも、お前の馬鹿な頭にはいれる」

「……」
「これが神の能力だ。少しはわかったか？」
「……」
「何とか言えよ、順平」
聞こえている。確かに女の声は鮮明に順平の頭に語りかけてきている。順平は、この感覚はなんだと思った。一瞬、超能力という言葉が順平の頭をよぎった。
「……こんな能力があるのなら、何故、携帯電話など渡す」
「あのな、お前だってフルマラソンの距離を走れと言われたら疲れるだろう。しかし、同じ四十キロの距離でも車なら楽だ、違うか？」
「それは、そうだけど」
「神の能力を使えば、私も多くのエネルギーを消費する。お前の為に私が、そこまでする義理はない。楽をするために携帯電話に代理をさせて何か悪いか？」
「悪くはないが……」
こちらが話した事が電話無しで、正確に通じている。何とも不思議な感覚に内心、順平

は戸惑っていた。
「だったら神様からの授かり物の携帯電話であるぞ。大切に扱えよ」
「この電話を使えば、お前を呼び出せるのか？」
「はい、では電話番号を言うから、頭にたたき込みなよ」
「まて、メモするから」
「心配無用。必ず覚えられる」
「俺の記憶力は、そんなに良くない、一度聞いたくらいでは覚えられない」
「お前の頭が悪いのは知っている。神の力で覚えさせてやるから安心して聞け。電話番号を言う。はい、五一〇を押したら次は、八そして一〇五九二だ。……どうだ、すぐ覚えたろう」
「……覚えた。しかし……」
「しかし、なんだ？」
「これは神の力でも何でもない。単なる語呂合わせだろう」
「正解！　ゴット、ハ、テンゴクニでした。――言ったろうメモなど不要だと」

そう言うと女の声は順平の頭から、すっと消えていった。
最後に女にしてやられたと思いながらも、電源を切った神さんの携帯電話を握ったまま、しばらく順平は眉をひそめ立ちすくんでいた。
会話はともかくとして、不思議な現象であった。確かに女の声は頭に響いてきた。それは紛れもない事実であった。
テレパシーという言葉を聞いた事がある。器具を使わずに頭と頭で会話ができる能力。超能力の一つとされるものである。状況からすれば、女はそのような力を使い、語りかけてきたとしか思えない。
奇妙な能力、これを人に話してもおそらく信じては貰えない。しかし、順平自身、間違いなく経験した。自ら経験をしただけに否定のしようがなかった。順平にしても常識的には神々の集団というものが、存在するとは思えない。しかし、人の能力を超えた特殊な能力を使える人間を、神と称するなら、それは神であるのかも知れない。
しばらく目を細めて考えていた順平であったが、話しの内容が内容である。リストにあがった五人の経歴は調べる必要があった。

インターネットを使い告げられた名前を調べた。川上晋蔵野党代議士、警察庁田所参事官、世田谷で黄田金融を営む黄田真一。警視庁の高木憲久についはてわからなかった。ネットで調べられないとなれば、おそらく警察幹部ではなく、現場に近い警察官であろうと思った。

六

それが三月十五日に神坂順平の身に起きた出来事であった。あれから一ヶ月、女が小物と称した黄田真一が死んだ。そして、もう一人、大畑という警察官が殺されていた。

今日までは平静を装い、いつもの生活をしてきた。しかし、ここにきての警察官殺害や会社役員殺害の発生は、さすがに順平にしても大きな衝撃であった。女の話しを全て信用した訳ではないが、神々の代理戦争という名の元に何かが始まろうとしてる。それは紛れもない事実であった。いや、すでに始まっているのだ。

順平は、女から告げられた五人の名前を記した用紙を前に、どうしたものかと思案した。しかし、何をしたらよいのか浮かばない、かといって逃げるにしても五月十五日までは、

自分の名前は外にはでないとなれば、まだ余裕があった。
会社もあれば生活もある。もう少し様子を見る、それが順平の出した、そのときの結論であった。とはいえ気持ちが滅入るのも仕方なかった。
翌日、重い気持ちを引きずり順平は職場へと向かった。淡い春の日射しが眩しい日だったが、順平の気持ちは沈んでいた。
朝、順平の同僚である櫻井綾子（さくらいあやこ）が順平の顔色の悪いのに気付いた。恋人という訳ではないが、会社ではわりと親しい二人である。
櫻井綾子はわりと小柄の娘である。性格は明るく、からっとしていた。順平の方が少し年上であったが入社当時に若干、綾子とはいわくがあり、それ以来、順平は綾子に対しては頭があがらなくなっていた。
「順平君、どうしたの？　顔色が悪いよ」
「そうか？　べつになんでもないけど」
「ほんとう？　少し青いよ」
「……」

一瞬、順平は迷った。迷ったが、何れ会社を辞める事になるかも知れない。綾子には、そうなる前に話しておこうと思った。

「綾ちゃん、少し話しがある」

そう言うと順平は、部屋の隅の方に歩いた。まだ、会社が始まるまでには時間があった。部屋にいる従業員の姿も疎らである。それでも周囲の人には聞かれたくはなかった。

普段、人目を避けたりしない順平であっただけに、少し心配そうに綾子は順平の後に従った。

「俺、会社を辞めるようになるかも知れない」

驚いたように見た綾子の顔が、急に真剣な表情に変わった。

「いきなり、どうしたのよ」

「詳しくは話せない。どうも何らかの事件に巻き込まれたらしい」

「事件？」

事件と聞き黒目の多い愛らしい瞳をくりくりとさせ、食い入るように順平を見た。

「しばらくすると総理大臣が襲われる。そうなったら俺も身を隠す。会社にもいられなく

なると思う」
順平の話しに眉をきゅっと寄せた綾子が、睨み付けながらいった。
「冗談ばかり言って、私、真剣に心配していたのに」
総理大臣が襲われる。考えて見れば会社の立ち話で、このような話しをいきなりしても、信じる人は居ないだろう。それは綾子にしても同じだと順平も気付いた。
「バレたか」と 順平は笑いを浮かべた。
「まったく、もう」
口元を尖らせて、再び、順平を綾子が睨んだ。
「御免、余り、綾ちゃんが真剣に聞くから、つい。……少し気分が悪いだけ、心配はいらない」
そう話すと順平は、綾子のそばから離れた。

第二章　三つの事件

七

櫻井健吾（さくらいけんご）が九州の警察署から、警視庁人事課監察（かんさつ）室に転属となったのはこの春からであった。

櫻井が配属された監察室とは主に、警察内部の不祥事や警察官に対する指導などを行う、いわば警察内の警察といった部署にあたる。その櫻井に公安部の大畑から電話があったのは、大畑が亡くなる前日であった。

その電話で大畑は櫻井の予定を聞いてきた。何か問題が生じたと感じた櫻井は、急ぎなら、これからでも構いませんと話したが、大畑の方で、これから人に逢うので数日後にして欲しいと言ってきた。それで二日後に会う事にしていた。ところが翌日、その大畑の遺体は日比谷公園で発見された。

櫻井にしても大畑からの電話は気になった。前日の電話と絡んだものであれば、監察員である自分に伝えたいとなれば、それは警視庁内で、何か問題があったと受け取るのが普通の考えになる。

大畑の遺体が発見されたのは警視庁から、それほど離れてない日比谷公園であった。大

畑は正面から鋭利なナイフの様な物で、心臓を一つ突きにされていた。抵抗した様子もなく、ほぼ即死であったというのが、検視官の見立になる。

殺害された大畑は公安部に所属する捜査員。公安所属の捜査員は、隠密性の高い仕事に従事している為に、事件関係者に逢う場合でも、警察官としての身分を隠したまま会う様な場合が多々あり、それだけに身を守る術も熟知しているし、いつでも細心の注意をしているのが公安の捜査員であった。その大畑が抵抗もせずに、たった一撃で殺害される。そこに先にあった電話の件を考え併せると、もし大畑が逢おうとしていた人物が、警察関係者などの顔見知りであれば、それなりに殺害された状況に納得がいく。

あくまで監察官である自分のところに電話があった。そこからの推測とはいえ、そうなると現職警察官を同じ警察組織の人間が殺害した可能性もでてくる。

勿論、捜査官という危険と隣り合わせの立場にいた大畑の死は、自分への電話とは無関係なところで起きた可能性も否定はできない。しかも、現時点では何の証拠もなければ、大畑が誰に逢おうとしていたのかさえわからない。捜査に予断は禁物である。そして捜査は現場の警察官が行う。自らの与える影響力を考えれば、櫻井は自分の考えを捜査本部に

話せるものではなかった。大畑殺害の捜査本部ができると、捜査本部には自分の考えは述べずに、大畑から殺害前に電話のあった事だけを櫻井は告げていた。

それに櫻井は大畑の電話に、もう一つの引っかかりがあった。

警視庁には自分以外にも多くの監察員はいる。その多くの中から、転属間もない顔さえ知らない自分に、大畑は電話をしてきた。これをどのように考えるかであった。

櫻井は自分の考えを元に大畑が、何の事件を追っていたのか内々で調べ始めた。

櫻井は大畑の件を調べているうちに、大畑と組んで捜査にあたっていた高木憲久という男に注目をした。二人は先輩、後輩の間柄で、高木が公安部に所属していたときは、二人で組んで捜査にあたる親しい間柄にあった。しかし、おかしな事に、その高木憲久は櫻井が警視庁に来る数ヶ月前に、公安部から刑事部に移っている。

おかしいと考えるには理由があった。国家公務員試験に通ったキャリアと呼ばれる幹部職員であれば公安であっても移動命令によって、簡単に移動をする。しかし、高木は、現場からのたたき上げ、所謂ノンキャリア。

公安部の警察官になるには、警察学校でも上位であった者が、自ら望んで特別な講習を

受けて始めてなる事ができる。高木も、その狭き門をくぐり公安警察官になっている。その男が僅か数年で公安から刑事課に移動となった事に、櫻井は何か腑に落ちないものを感じた。

八

大畑の死は現職警察官の殺害である。警視庁内は色めき立った。事件の捜査は捜査一課、吉田課長が陣頭指揮を執る事になった。そこには同僚の死に対する復讐心や、警察の面子にかけての思惑などが渦巻き、警視庁としても、多くの捜査員を投入していた。

その捜査員の中に高木の姿もあった。高木は公安部では大畑の先輩であっただけ、大畑の死に対して深い憤りを持っていた。

高木は数ヶ月前の移動を、思い出さずにはいられなかった。

高木の上司であった鴨田は、刑事部係長に空きが出た。君に取っては悪い話しではないと言って、高木に刑事課への移動を勧めた。当時、高木は何故、自分が刑事部へとの思いがした。しかし、刑事部捜査一課は殺人などの凶悪犯を扱う、警視庁の花形部署である。

まして、そこの係長であれば公安部からとはいえ、抜擢であるに違いはない。高木にしても異存はなかった。

今更、あのとき、ああだったらと考えてもどうにもならない。それでも、もし自分が刑事課に移らずに、大畑と行動を共にしていたら、あるいは大畑の死はなかったのではと考えると、いっそやりきれない気持ちになる。

刑事部に移ってから大畑との接触は途絶えていた。公安部はテロや思想的な犯罪について捜査を行う部署であり、その活動は極めて隠密性が高く、公安として独自に捜査を行う。刑事部は、一般的な犯罪を扱う事から、仕事の内容が異なる。隠密性の高い公安は、よほどの事でもないと、警視庁内の他部署と連携して捜査にあたる事も無ければ、公安が得た捜査情報を他部署に渡したりする事もない。それだけに公安部員は同じ警察仲間との接触もさけるほど慎重である。それは、高木自身公安に居ただけに誰よりも知っていた。接触は失っていたが、大畑が殺されたとなれば話しは別である。後輩の死であるだけに、何が何でも敵は取りたいとの強い気持ちで捜査に望んでいた。

そんな高木であったが、大畑殺害の捜査から外れる事になった。警視庁管内で、大畑の

死から数日後に、会社役員が殺害される事件が起きた。その事件を高木のいる四係が担当する事になった為である。高木は悔しいと思った。しかし、自分も組織の一員であり、部下を持つ立場である。大畑の件は同僚捜査員に任せ、殺された会社役員の事件を追い出した。

高木達が調べ始めた黄田真一は、世田谷で金融業を営んでいた四十二歳になる男であった。殺害されたのは、夜の十時くらい。事務所を出たところを、何者かによって背後から鋭利な刃物によって数カ所、刺され殺害された。

殺された黄田の評判は良くなかった。金融業を表看板にして、裏では法外な利息で貸し付けをしていた。取り立ても厳しく黄田を恨む人間は多くいた。そのうえ目撃者もいなかった為に初動捜査では、まだ、これといったものは出てなかった。

警視庁が二つの殺人事件を追うなかで、今度は、現職の総理大臣が五月の連休を使い、地元群馬に戻った際に狙撃されるという大きな事件が起きた。

幸にして総理大臣を含めて怪我人はなかったが、現職総理大臣に対する狙撃とあってマスコミは大々的に報じた。

3

総理大臣襲撃を知った順平は、急に落ち着かなくなった。仕事をしていれば気も紛れた。しかし、連休とあって、考える時間は山ほどにある。しかも、女の言った五月十五日は、刻々と迫っている。さすがに順平にも焦りの色が現れていた。まずは神のしもべなる女に、総理や黄田の件を確かめてみる。それが順平の最初に浮かんだ考えであった。

順平はゴット　ハ　テンゴクニと携帯電話の番号を押した。

「もし、もし、九十八番か？」

「ちょっとまてよ、番号で呼ぶのは失礼だぞ」

少し怒ったような女の声が聞こえてきた。

「勝手を言うな。俺は九十八番目に選ばれた。その俺に取り憑いたしもべなら九十八番だ。違うか？」

「たしかに、順平から見たらそうなるかもな。しかし、嫌だな、その呼び方。どうも、番号で呼ばれると囚人にでもなった気がする」

「お前の名前なんか、どうでも良いが、お前が言った二人にトラブルがあった。あれは本当に、代理戦争によるものか？」
「当然だろう」
「何故、当然なんだ。俺には理解出来ない。総理大臣がリストにあがるのも疑問がある。総理大臣を指名しても、とても総理大臣が人を殺すとは思えない」
「総理が圧力を掛ければ警察でも自衛隊でも使えるでしょう。やはり、この国で一番、力があるのは総理大臣。神様から指名を受けた人間を次々に逮捕できるかもね。だから、それだけ人気もあるわ。それに総理なら警護も万全よ」
　その言葉に、順平はえっと思った。
「ちょっと待った。それ、おかしくないか？　これは殺し合いと違うのか？」
「野蛮人め、ルール的には必ずしも殺す必要はない。相手の自由を奪えば、それで良い。例えば刑務所に送る、毒を盛って植物人間にする。無人島に隔離をする。相手から戦う力を失わせれば、それで勝ち。勿論、手っ取り早く殺しても構わないけどね」
「そんな馬鹿な……お前な、前に相手の自由を奪うのは殺す事だと言わなかったか？」

「そんな話ししたかしら？　別に殺しても自由は奪えるわ。言ったとしても間違ってはないわよ」
「いや違う。これは重要だ。そこはきちんと言うべきだ」
「私を責めるな。確認をしなかったお前が悪い」
都合が悪いとみたのか、急に女の口がぞんざいになった。
「しかし、逮捕でもよいとなれば、話しは全く違うぞ」
「わかった、わかった。うるさい奴だ。じゃ、今、はっきりと言う。逮捕でも構わない。これで文句はあるまい」
女は、投げ槍的に告げた。神の使いにすれば所詮(しょせん)は他人事である。確認しなかった自分が悪いと言われれば、その通りなのかも知れないが、ただ、これは大変な事になったと思った。人を殺すとなれば、殺す側も相当の覚悟が必要になる。それが逮捕でも構わないのなら、逆に容易に手出しができる。そうなると、俄然(がぜん)、権力を持つ代議士や警察関係者は有利になる。
うーんと唸る順平の声がした。

「わかっただろう。順平のような社会の底辺でうろうろする人間より、権力者に指名が集中するのは当たり前。私は前に言った。お前が選ばれたのは奇跡だと、常識的に見て、お前が勝ち残るチャンスは、私には皆無にうつる。だから、私はお前が神様から選ばれたのが不満だ」
「おい、おい、神様が選んだ人間に、それは無いだろう。それこそ神様に失礼ではないか？」
「つい口を滑らした。これは神様には絶対に内緒だぞ。いいな」
「心配するな、どうせ神様と俺は、直接話せないのだろうから」
「そうだよ。話せる訳はない。心配をして損をした。まあ、私の気持ちは別としても職責だけは、全うするから安心しろ」
　どこまで本気なのか、まったくつかみ所のない女であった。
「なあ、九十八番、これでは組織が使える人間と俺では余りに、ハンディが大きいとは思わないか？」
「うるさい奴だな。うちの神様は一弐のドンでお前を選んだ。ハンディなど考えたら、お

前は選ばれない。それに、さっきから九十八番、九十八番と番号で呼ぶ、非常に気分が悪い」
「じゃ、何と呼べばよい」
「そうだな、沖縄の青い海、青子と私を呼べ」
「あおこ？　おかしな響きだな。あおこって、沼などに繁殖する藻だろう」
センスのかけらも無いのかと、話しながら順平は苦笑いを浮かべた。
「藻じゃない、青色の子供だ、その何処がおかしい」
「まあ、別にお前が青子でいいのなら、俺は構わないけど」
「……まて、……では沖縄の子で、沖子はどうだ」
やはり、何処か、この女はピントがずれていると感じた。
「どっちでも構わん」
「あのな、これから、しばらく付き合う女の子の名前を、どっちでも良いとは何事ぞ」
ああ言えば、こう言う、全く面倒な女であった。
「わかった、わかった。沖縄を代表する子供。沖子、最高の名前だ。それに決めろ。ただ

自分の名前だ、間違うなよ」
「アホか、私は神の使い、間違う訳はないだろう」
「それならよいが、ところで沖子、この戦いにペナルティはないのか？　戦うのが嫌だと思えば、金を持って三年間ひたすら逃げる手もある」
幾ら金を積まれても、犯罪に手を染めるなど出来ないと考えていた順平にすれば、確かめたかった事の一つであった。
「無理だな、二年後には強制的に、五十人が脱落させられる」
「落とされるとは？」
「ポイントの低い順から、殺されたり犯罪者にされる」
「それは、どう言う事だ？」
「お前な、これは神様が仕掛けたゲームだよ。例えば、順平に殺人の汚名を着せて逮捕させる。後ろから近づいて刺し殺す。何でもできる。なにしろ、お前が何処に隠れようと神はすぐ知る事ができる。それでも逃げるか？」
「酷い話しだな」

「そう、だから、金も与えている。二年間何もしなかったら、権力者なら権力の座から引きずり降ろされて死ぬか牢獄行き。だから、総理や代議士であってもポイントを、稼がないとならない。すばらしいシステムだろう」
　内心、順平は巫山戯るなと思った。雁字搦めで逃げる事もできないように仕組まれている。さすがに、順平の顔色も幾分険しい物になった。
「海外に出たら、どうなる？」
「こっちは神様。逃げ切れると思うか？　何処にいてもお前の場所は判る」
「……」
「やっと自分の置かれた立場が、理解できたようだな。どうする、順平」
　押し黙った順平に冷たい声が掛けられた。
「まあ、それがルールなら仕方ない」
「もう、質問はないね？」
「ある、お前は、本当に、こっちから聞かないと何も話さないからな」
「いや全部、話したと思うけどね」

「いや、話してない。大体、お前の言う大会のスタートはいつで、終わりはいつだ。肝心な事だ」
「あら、それも話さなかった？」
「話してない」
沖子の話しによると神々が大会の話しを決めたのが、今年の年始めの一月一日であったと言う。そこから十日ほど神々が指名する人物の選考を行い、一日に三人から四人の指名を順次したと述べた。
「すると、最初の指名は一月十日になるのか？」
順平は全く計算があわないと思いながら聞いた。
「神様の世界は、今でも旧暦のままだから一月一日は、あんたらの使ってる暦だと今年は、確か二月五日にあたるのかな」
「そうなると、そこから十日が最初の神様が代理人を指名した日となるから、こっちの暦では二月十五日が大会のスタートした日。三年後の二月十五日が終了だな」
「おそらくそんな所だ」

「おそらくかよ。全くいい加減だな……あれ、まてよ。俺の所に連絡が来たのは三月十五日だったよな」
「そうだよ。神様が指名した順に連絡をしている。最後のお前に連絡が行くまでに丁度一ヶ月を要した」
「……なあ、沖子。お前、何か勘違いをしてないか？」
「わらわが勘違いをしている？」
「ああ、たしかに俺に対しては、新たに五人の名前を知らせてくるのは、二ヶ月後であれば五月十五日になるよな」
「そうだ」
「それじゃ、大会のスタートしたのが二月十五日なら、一番初めに指名を受けた人にはいつ知らせる」
「それは二ヶ月後の四月十五日になるな。あれ、今日は五月三日……あれ」
「あのな、沖子。もしかして俺の名前は、すでに外に流れているのと違うか？」
「そのようだな。ピン、ポン」

「ちょっと待てよ！」
「そう怒るな。こうして話していられるくらいだから、お前は、まだ、殺されてないし」
「当たり前だ！」
「怒るなというのに。まあ、仕方ないだろう。そうなると、とりあえずは、すぐに、その部屋をでる事だな」
沖子は、何でもないように言った。それが、また、順平を腹立たしく感じさせた。
「待て、俺には会社がある」
「そんな悠長に構えていて良いのか？　逃げるが勝ちとも言う。それに下界は、今は連休ではないのか？」
腹は立ったが、今更、沖子と言い争っても仕方なかった。すでに名前や住所が誰かに知られているとなれば、何をおいても逃げるよりなかった。
「神様ばかりか、お前も、相当いい加減だ！」
少々呆れながら、沖子に順平は苛立ちを浴びせると電話を切ろうとした。
「なあ、順平、私はお前のアドバイサーだ、少しだけ話しを聞け」

「あのな、俺は逃げないと駄目なんだ。お前とゆっくり話している暇はない」
「そう焦るな。逃げるのに車は駄目だぞ。ナンバーから足が着く」
「……わかった」
「それにな、お前の携帯電話の電源を切らなかったら、お前の居場所は特定される」
「携帯も駄目か？」
「そうだよ、警察関係者や電話会社関係者なら調べられる」
携帯電話は、そのエリアをカバーする基地局、要は受信アンテナのある中継基地のようなものが、無数にあってネットワークを構築している。携帯電話を持っている人が、あっちこっちへと移動すれば、何処にあるか判らない携帯電話を呼び出すには、全国、全ての基地局で、その携帯電話を呼び出す電波を出さないとならない。一台の電話機のために全ての基地局を動かす。それでは余りにもシステムにとっての負担は大きい。その問題を解決するには、電話会社は、携帯電話が何処に動いたか事前に知っていれば、携帯電話の動いたエリアの基地局に対してだけ呼び出しを行えば済む。
現在の携帯電話の仕組みは携帯電話の電源を入れた時から、その携帯電話のＩＤのよう

な物を近くの基地局に送信して、携帯電話の位置を常に携帯会社のシステムに知らしている。これが一般に言われる微弱電波である。従って、携帯電話を管理する会社は、携帯電話から常時でいる微弱電波から携帯電話のある基地局の位置を知る事ができる。いざとなれば、その情報は警察でも利用が可能だと、女は順平に告げた。
「いいか、順平。お前の敵は、警察にも携帯会社にも居るかも知れない。そこまでの用心をしないと、生きてはいけないぞ」
「……俺から車や携帯まで奪う気か？」
頭ではわかっていた。しかし、田舎での車無しの生活は何とも不便なものになる。それだけに愚痴もでる。しかし、それに答えず沖子が淡々と続けた。
「タブレットパソコン、モバイル系、ネットにつなぐのは、これも駄目だな」
「警察が絡めばそうだな」
「携帯電話にしろパソコンにしろ、まあ、ピンポイントで場所を特定するのは難しいけど、それでも移動経路や範囲の特定はできる。使うならその覚悟はしろよ」
「……俺から、全てを取り上げるのか？」

「私は忠告をしているまで、使いたければ使えばよい」
「お前は、俺のアドバイサーと言ったな」
「そうだ。私の立場としては、順平には生き残ってもらわないと困る」
「俺の携帯は使えない。それはわかった。この、お前が送った神さんの携帯電話はどうなんだ」
「神さんの携帯電話は特殊なものだ。使っても警察などに調べられない。安心して使いな」
「神さんの携帯で、よそに掛けるのは駄目か？」
「余所とは、私以外にか？」
「そうだ」
「無理だな。専用だ、余所とはつながらない」
「そうか、わかった。取りあえず逃げる」
沖子との電話を切ると、押し入れから大きな鞄を取り出し、それに必要なものを一纏めにした。携帯電話の使い納めだと思いながら、自分の携帯電話でタクシー会社に電話をし

てタクシーを呼ぶと、携帯電話の電源を落とした。
田舎町の事である。車が使えないとなれば、電車などの交通機関の発達した場所でないと不便になる。順平は、県庁所在地でもある水戸に行く事にした。タクシーの中では、常に後ろの車に注意をした。追われている様子はなかった。それでも順平は、タクシーを降りると、しばらく駅周辺の人混みや、人通りの少ない路地を歩き、追跡者のないのを確認してから、駅近くのホテルにチェックインした。
部屋に入った順平は、フーと大きく息をした。とにかく沖子には驚かされた。まさか、すでに自分がターゲットになっているとは思わなかった。一応、当面の危険は去ったとはいえ、いよいよ神々の代理戦争の渦中に身を投じたと思うと、急に不安が襲ってきた。
ホテルの窓から外を見ると、楽しそうな人で溢れていた。五月の連休期間中である。会社勤めの人にとっては待ちわびた休み、無理もない情景であった。それだけに自分は何故、こんな部屋で缶詰にされなければ成らないのだと、その理不尽さに苛立つ心を抑えられなかった。
順平は五月の連休後半の数日はそれでも、じっとホテルの中で我慢をしていた。人から

自分が狙われる。順平にすれば始めての体験だけに、人混みに出るのが怖いと思ったからであった。

九

総理大臣襲撃のニュースに触れ、櫻井綾子も驚いていた一人であった。連休に入る数日前に、会社で順平が述べた事が現実になった。偶然との思いも一瞬頭を過ぎったが、あのときの順平の様子を考えると、もしやとの不安になる。

綾子は何度も、順平の携帯電話に連絡をしたが、順平の携帯電話には繋がらなかった。綾子は順平の友人である尾道や有田にも聞いてみたが、やはり順平とは連絡が取れないと聞かされた。

不安な気持ちは日増しに強まった。そんな自分の気持ちが嫌で、連休が終われば順平は、何事もなかったように元気な姿を現すと言い聞かせていた。しかし、連休が終わっても、会社に順平は姿を現さなかった。

その頃、順平は水戸のホテルに居た。連休が終われば順平にしても会社への連絡をしな

いとならない。順平はホテルの電話を使い、勤め先である中原商事に電話を入れた。
しかし、順平にしても会社にどのように話して良いかわからない。綾子なら上手くやってくれるだろうと思うと、綾子を呼んでもらった。
順平からの電話と知った綾子は、それだけでもほっとした。
そんな綾子に順平は済まないが、しばらく会社を休むと伝えた。しかし、しばらく休むと言われただけでは、綾子にもどうしょうもなかった。
「前に話した事が原因なの？」と、小声で綾子が聞いてきた。
総理大臣が襲われると告げられた事を指してであった。
「まあ、そんなところだ」
「今は、何処にいるの？」
「水戸、ともかく逃げた。くわしい話しは後でするから、会社にはしばらく休むと、適当に話しておいてくれないか？」
「すぐ片づくの？」
「それも、わからない」

「じゃあ、いつまで会社に休みを出すのよ、それに連休明けよ」
綾子にしても、適当にと言われても困るのであった。まして、連休明けでは、何日も休む口実は、なかなか浮かばない。
――そうだよな、連休直後だもの。困ったなと順平も考え込んでいた。
「……取りあえず足の骨でも折った事にしておく？」
「そうだな、それでいいや。後は綾ちゃんに任せるから」
綾子も仕方ないと思った。
「それで、いつ会えるの？」
「少しバタバタする。少し待って欲しい。後から必ず連絡するから」
「……なるべく早くしてね」
順平からの電話が切れた。順平は無事だった。その事に安心したが、一体、順平の身に何が起きているのかと思うと、再び綾子は不安になった。
取りあえず会社への連絡は終わった。さて、どうするかと順平は考えた。

翌日、順平は水戸のホテルを出ると、そのまま水戸駅から常磐線で東京の秋葉原の電気街に向かった。水戸から秋葉原は乗り継ぎさえ良ければ一時間半もあれば行ける。

連休明けの日中のためか、電車はわりと空いている。それでも、順平にしたら気持ちのよいものではなかった。電車の中でも自然と周囲に目を配る。人が目の前に立てば、はっとする。電車に乗っている一時間半という時間が、これほど長い時間とは思わなかった。すっかり萎縮している自分を感じた。人から逃げ回る生活が自分を変え始めたと感じた。

それでも順平は、今に見ていろと自分自身を、奮い立たせていた。

順平は電車を降りると秋葉原の電気街に足を進めた。そこで幾つもの電器店を回り電子部品などを多数購入すると、また、水戸のホテルへと戻った。

順平が秋葉原に行ったのには理由があった。神のしもべと称する女は逃げても場所が判ると言った。今の時代である。携帯電話を送りつけて場所を特定できると言われれば、携帯電話に位置を検出するＧＰＳ機能が仕込まれている程度の想像はつく。

元々、順平は理工系の大学を出ているので、その辺の知識は持っていた。ＧＰＳの件だけではない。沖子は専用の電話だと述べた。実際に違う場所に掛けても使えなかった。お

そらく一般の携帯電話とは違う周波数や信号方式を使っている。その辺についても調べてやると思った。その為に、順平は、測定機器や電子部品などの必要な機材を、秋葉原の電気街で探してきた。

十

水戸のホテルに戻った順平は、様々な電子部品や機器をホテルの部屋で、夢中で組んだ。パソコンのプログラムも書いた。勿論、携帯電話を調べる為にである。

それは、逃げ回る退屈な日々から、しばらく振りに解放された日々でもあった。狭いホテルの部屋ではあったが、目的を持って何かに夢中になれるのは、こんな素晴らしい事であったのかと、思わぬ発見に順平の顔に生気が宿っていた。

「できた！」

静かな部屋に声があがった。乱雑に置かれた、様々な剥き出しの電子部品を前に、満足そうな顔をした順平の姿があった。

（まずは、使われている周波数がどのようなものか調べないと……）

電子部品と繋がったパソコンを起動させ、計測用のプログラムを立ち上げた。
「よし」と自分に言い聞かせると、順平は神さんからの携帯電話で女を呼びだした。
「九十八番出てこい」
「おい、九十八番はよせと言った。沖子さんだろう」
「ああ、済まない、それじゃ沖子」
「さん、はどうした？」
「何処かに忘れてきた」
「呼び捨てとは腹の立つ男だ。じゃ、少しお仕置きをしないとな」
「……」
「お前、この前、逃げる事を話したな」
「ああ」
「今、お前が何処に居るか当てようか？」
「何処だ」
「水戸駅近くのホテルだろう。どうだ、これでも逃げられるか？」

どうしても女と話す時は、携帯電話の電源を入れないとならない。携帯電話にＧＰＳの機能があれば、場所が知られて当然だと思ったが、その事を話す必要はなかった。

今日の話しは楽であった。別に沖子から聞きたい話しがある訳ではない。携帯電話の信号を調べる為の通話である。順平にすれば単なる無駄話でよかった。

「驚いたようだな、神から逃げられるとは思うな」

「そっちで居場所が判るのなら、たしかに逃げようもないな」

「そうだ、ところで順平は数日前に、東京の秋葉原に何のために行った」

その言葉に順平はあっと思った。秋葉原に行った時には、用心して神の携帯電話の電源は切っておいた。電源を入れたのは水戸のホテルに戻ってからである。それは絶対に間違いない。てっきり携帯電話のＧＰＳで居場所を調べていると思っていただけに、順平を慌てさせた。ＧＰＳで位置を追っていたのでなければ、跡を付けられたのか？　いや、そんな事はない。人に見張られるのを恐れた順平は、常に用心をしていた。山手線では閉まるドアに飛び乗るような事もしていた。

「……」

「どうした、何を黙っている」
「……あのな、神様のしもべなら、俺が秋葉原に行った理由などお見通しだろうと思った。それが判らないのに驚いた」
何でもよかった、自分の気持ちを悟られないように、適当に言葉を繕った。
「言っただろう。神様の力を使うのは疲れる。聞いた方が楽だから聞いた」
「だったら好きなように調べてくれ。それよりも、ルールは前に話した以外にないな」
順平は、秋葉原の話から話題を変えたかった。
「ああ、相手を葬ればよいだけだ、手段はどんな手でも良い」
「よし、わかった。それだったら先制攻撃を仕掛ける」
「ほう、やっとやる気を出したか、さあ何をする」
「簡単だ、これから俺の知っている相手に連絡をする」
「連絡？」
「別に、敵と連絡を取り合ってもルール上の問題はないだろう」
「何をしても勝ち残れば良いのがルール、まあ、問題はないな。しかし、それでどうす

る」
「告げられた人名のリストを交換しあう」
「やはり、お前は馬鹿だな。お前の知っている相手が、全てお前を知っている訳ではない。お前は知らない相手にまで、お前の存在を教えるのか？　それが判らないとは呆れる。それに、敵であるお前に本当のリストなど出してくると思うか？」
「なるほど、そのような考えも出来るか。困ったな。では後ひとつ聞きたい二年後には五十人脱落させると言ったな」
「ああ、そうだ」
「沖子は、そのときボーダーラインをどの程度と見ている」
「最低一人、処理すれば残れるな」
全員で九十八人、半数の人間が一人を倒せば、その時点で四十九人が残る。複数の人間を倒す者も居るだろうから、間違いなく一人倒せば半数には残れる。
「二年で一人だな」
「やる気になったか？」

「沖子から、俺は、どのような情報が得られる、例えば、逃げた相手が何処に隠れているとか？」
「それは駄目だな、私が話せるのはルールや、身を守る術とか世間一般の話しだけだな」
「まあ、勝手にやれという事か」
「そんなところだな」
「ところで、この大会はいつから始まった」
「そんなものを聞いてどうする？」
「戦術を練るための参考にする」
「お前の頭でか？　まあ、いいだろう」
沖子の話した事によれば一回目は、一五七〇年から一六〇〇年の三十年の期間を掛けて行ったという。
「ずいぶん長い期間だったんだ」
「そうか、別に長いとは思わないが。まあ、最初だから三〇年でやろうと決まった」
このとき参加者は戦国武将と呼ばれた人物が中心で上杉謙信、武田信玄、織田信長、羽

柴秀吉、明智光秀、徳川家康などであったと話した。
「最後まで残ったのが、羽柴秀吉、後の豊臣秀吉と徳川家康だった。かなり豊臣秀吉はいい線までいったんだけどな」
「たしか、秀吉は関ヶ原の前に死んでしまった」
「ピンポン、一五九八年、神が決めた期限の二年まえだな、結局、そのとき勝利したのが家康だった。良く聞けよ。その時、家康をリストアップしたのは、なんと沖縄の神様だ」
「それは凄いな。沖子が仕えるニカ何とか様か？」
「ニライカナイ様だ。……残念だけどニライカナイ様ではなかった」
「同じ沖縄の神様というだけか、それじゃ意味ないだろう。そのときニライ様は誰を押した」
「……武田信玄」
「……武田？　長篠の戦いで負けているな。違うな、長篠で負けたのは武田勝頼か？」
「そうだ」
「そうすると武田信玄は、そのずっと前に亡くなっている」

「大会が始まって三年目の一五七三年に消えた」
「三十年続く大会の僅か三年目かよ」
「早かった。早いが、それがどうした？」
「開き直るなよ、開き直る位なら最初から、はしゃぐな」
「つまらん男だ。しかし、家康を選んでいたのは沖縄の神様に違いはない」
「わかったよ。それが最初なのは、今回は二度目か？」
「いや、今回は三度目、次は幕末から明治にかけてだったな。一応三百年を越えない範囲と期間が決まっている」
「年代では？」
「一八五〇年から一八八〇年の三十年だ」
「おかしいだろう、何で今回だけ期間が三年なんだ」
「別に期間は、神が決める事、かまわんだろう」
「そうはいかない。俺だって関係者の一人だ。今まで三十年でしてきたのに、今回だけ三年とは余りに短い」

「それはだな、神からの手紙を作る際に事務手続きのミスがあった」
「手続きミス？」
「事務方が三十年とすべきところを、ゼロをつけるのを忘れた」
「それで三年かよ」
「別に何年でも文句はあるまい、すべて神が決めた事。ただな、神様も、三年で一人だけの優勝者では可哀想だと思ったのか、今回は十人が残れるようにしてある。これまでは一人だけだぞ。ずいぶん神様は優しいと思わないか？」
「何だよ、残れるのは優勝者だけではないのか？」
「何人残ろうが、お前には、関係なかろうが」
「すぐ消されると思っているのか？」
「じゃ、逆に聞くが、残れる自信があるのか？」
「自信ではないが、こっちは命がけ、その十人に残るよりないだろう。ちなみに前回の参加者は誰だ」
「西郷隆盛、吉田松陰、木戸孝、大久保利通、坂本龍馬、高杉晋作など、勝ち残ったのは

伊藤博文だ」
「そのとき沖子の神様は誰を推薦した」
「……吉田松陰」
吉田松陰は長州藩士の思想家で、明治維新の精神的な指導者のような人、ただ、沖子の言う年代の初期に政府の逆鱗（げきりん）に触れ幽閉（ゆうへい）されていた。一八五〇年の末には死罪となった人物である。
（これも、また早々とリタイヤしているな）
「順平、何故、聞いてこない」
「いや、別に聞いても仕方ない」
「……ああ、そうだよ、このときも早かった」
「そう、ふてくされるなよ」
（沖子の神様とやらは、いつでも最下位近くの争いをしている。なぜ、自分みたいな者が選ばれたのか、わかるような気がする）
ふと、そう思った時、順平は妙な感覚に襲われた。

（これは架空の話しだ、それにどうして、こうもあっさり引き込まれる？）
架空の話しと頭ではわかっていても、そこには自分が選ばれてもおかしくないという状況を巧みに組み入れている。だから、ついつい話しに乗ってしまう。
順平は、間違いなく今、自分は沖子の話術の巧みさに操られていると感じた。
「三〇〇年を越えない時期に開催される大会か、メチャクチャ運が悪かったな……」
前回は一八八〇年であれば、単純に三〇〇年を足すと西暦二一八〇年になる。そこから三〇年を引いても、第三大会は二一五〇年頃の開催になる。開催時期が百年以上早い。こういう事を平気で話してくる。どうせ旨く逃げるのだろうと思いながら、順平は沖子に問うてみた。
「早すぎだ、開催時期が、余りにも早すぎるぞ」
「あのな、神様は、そんな細かい事は気にしない方々だ。ごちゃごちゃ文句を言うな」
なるほどと思った。ここで神様を持ち出してきた。何か不都合があれば、人と違う神様を引き合いに出し、全て終わりにできる。
（神という言葉を与えられたときから、俺の頭は麻痺させられていた……）

順平は、やられたなと思った。沖子の話は、間違いを含めてきっちりと計算がされている。それが今日の話しではっきりとわかった。

詳しく歴史まで調べている女が、幾つもの間違いを平気で話したりはしない。まして、嘘で固めた話なら矛盾のない理路整然とした話しができる。ただ、理路整然とした話しは堅苦しくなり、こちらも警戒してかかる。しかし、冗談とも本気ともつかないような話しに間違いまで含んでいれば、、こちらも真剣みがそがれ気軽に応じられる。

巧みに心理を突いてくる女、順平は大変な女を相手にしていたなと思うと、思わず苦笑が浮かんでいた。

「……しかし、リストに載せられた身とすれば、文句の一つも言いたくなる。なあ、ここで相談だ。沖子、神様に進言して開催時期を後百年遅らせてくれ」

「馬鹿か、神様の決めた事、変更は出来ない」

「駄目か？」

「駄目だ」

「……俺、何もする事がなくて死にそうだ」

「適当に、金を使って遊んだらいい」
「狙われている。そんな気分になるかよ」
「どの道、短い人生になる、今のうちに楽しめ」
「沖子！　お前、俺がすぐに消えると思っているのか？」
「あ、た、り、ま、え、だ」
「お前は、俺に勝って欲しくはないのか？」
「今の言葉は、私の心からの感想。また、これが良く当たる」
「……」
「どうした、順平」
「まあ、お前が、そんな気持ちでは、とても俺は勝てない」
「諦めたか？」
「こっちは、命がかかっている、簡単に諦められるか」
「やっとやる気になったと見える。良い事だ。とはいえ、お前は小物、そのハンディがある。神様も咎(とが)めたりはしまい。ご褒美(ほうび)だ、数日早いが頑張れるように、次の五人を教える

よ。ハイ、メモの用意」

そう言うと沖子は、五月十五日に伝えてくる予定の、五人の名前を告げ電話を切った。

十一

沖子という女にはやられたとの苦い気持ちが起きた。しかし、それよりも順平とって不味いのは、携帯電話の電源を切って東京に行ったのに、それを知られていた事であった。

携帯電話による位置探査でなければ、これからも順平の居場所は沖子に知られる。携帯電話でなければ、いったいどうやって場所を知る事ができたのだと、小首を傾げながら順平は考えていた。

そのとき、順平の目は携帯電話の周波数を調べていたパソコンの画面にあった。順平の目が計測プログラムの画面に釘付けになった。

（何だ、これ、……携帯電話から電波がでている）

そう思った順平は手にしていた携帯電話を見た。携帯電話の小さなモニタ画面には何も表示がない。当然である。何か気味悪さを感じた順平は、沖子との話しを終えると、携帯

電話の電源を切っていた。しかし、パソコンの計測画面には、今でも携帯電話から電波がでているようになっている。――こんな手を使っていたのかと、少々順平は忌々しそうな表情に変わった。

電源を切っても電波が出ているとなれば、それは電源スイッチでモニタ回路と音声回路だけを遮断させれば済む、簡単な仕掛けとなる。携帯電話機に慣れ親しんだ者なら、携帯電話の電源スイッチを押して表示画面が真っ黒になれば、電源は切れていると思い込む。その思い込みを利用したものだった。

順平は、少し口元を尖らしながら、携帯電話から出ていた周波数を調べだした。順平の手元には秋葉原で買い込んできた携帯電話に関する書籍が置かれていた。

その書籍と、携帯電話から出ていた電波周波数を付き合わせてみた。

（周波数が変えられている）

二度、三度、頭を縦に動かし納得の表情をした。その口元からは小さな声で「神さんなら、こんな仕掛けは必要ない」と呟いた。

携帯電話の仕組みに詳しくない人なら携帯電話に使われている周波数は、何か一つの周

波数だけが使われていると考えてしまうかも知れない。しかし、実際は携帯電話会社は国から周波数を帯域として与えられている。

周波数帯域とは、周波数の集まった幅の事である。携帯電話会社は仮に八ギガヘルツ帯であれば八．三〇〇ギガヘルツから八、六〇〇ギガヘルツのような幅で国から周波数帯域を与えられる。携帯会社では、この帯域の電波を例えば〇．二五ギガヘルツ刻みの周波数として使うと十二の違う周波数を携帯電話に割り振る事ができる。

トランシーバーは近くで同一周波数のものを使うと混信が起きて通信はできなくなる。携帯電話も同じで近くで携帯電話が使われていれば混信などを防ぐには、与えられた帯域の違った周波数を使わないとならない。携帯会社では周波数分割多重とか時分分割多重などと呼ばれる手法によって周波数を使いわけている。

神さんの携帯に使われていたのは、Ａ携帯電話会社が得た周波数帯域のなかで、予備として未使用となっている周波数が使われていた。

その為に、Ａ社の基地局を経由して通信を可能にしていたが、元々未使用の周波数のために、それを使えるように改造した携帯電話間でのやりとりしかできないのであった。

携帯電話を調べてわかったのは、神さんの携帯電話には、色々な技術が使われていたというものであった。それは、素人等が簡単にいじれるレベルのものではなかった。そこから見ても、また、数千万の金を自由に動かせるなどのこれまでの経過を考え合わせると、沖子の裏には、何か得体の知れない大きな組織が付いているのは間違いなかった。それだけに順平を益々不安にさせた。

当面の目的であった携帯電話は調べ終えた。さて、どうするかと順平は思った。この場所はすでに沖子に知られている。まして沖子の後ろにはおそらく大きな組織がある。

携帯電話から完全に電波をとめるは、今の順平は簡単にできる。しかし、電波をとめれば、それは沖子に知られる。それを避けるために取りあえず、今でも神さんの携帯電話からは電波を出していた。しかし、いつまでも出している訳にもいかない。順平は、携帯電話を持ってホテルからでた。

順平は慎重に周囲に目を光らせながら、しばらく歩き続け跡を付けている人間が居ないか様子をうかがった。付けられている様子はなかった。

いいだろうと思った順平は、携帯電話を取り出してじっと見た。その携帯電話からは二本のジャンパー線が伸びていた。それはＧＰＳ機能だけを切り離す為に順平が付けたものであった。何かあれば、この携帯は使う必要がある。その時でも居場所は知られたくない。その為のものであった。

すでに次の五人の名前を沖子から聞いていた順平である。当面は神さんの携帯電話に用はなかった。完全に携帯電話の機能をとめるだけであれば、携帯電話からバッテリーを外してしまえばよかった。姿を隠すと決めていた順平は、携帯電話のバッテリーを外した。これで沖子に場所を知られる事はなくなった。

順平は水戸から離れるために、タクシーに乗り那珂湊（なかみなとし）市に向かった。那珂湊市にあるホテル近くでタクシーを降りた順平は、近くの公衆電話から会社へと電話をして、綾子を呼んで貰った。

会社を休みだしてから十日余りが過ぎている。それも気にはなっていた。

綾子が電話口にでた。電話にでた綾子は、会社側でも詳しい怪我の様子を知りたがっている事や、順平の連絡先が判らずに困っている事などを伝えてきた。

順平も、そうだろうなと思った。ただ、今はどうにもならない。
「会社で病院の診断書が、必要だと言っているよ」
「だろうな……これ以上は会社に迷惑はかけられない。仕方ない会社は辞める」
「なにをいってるの！　もう少し私に話してよ」
「わかった、明日の夜、逢って貰えるか？」
「今日でも構わないわ」
「ある事情からパソコンが使えない。少し調べて欲しいものがあるんだけど」
「……それは良いけど」
順平は、沖子から新たに告げられた五人の氏名について綾子に、ネットで検索して欲しいと頼んだ。

十二

翌日の夜、順平は石岡市にある喫茶店で綾子と逢っていた。
見た目は仲の良いカップルの語らいに映る。しかし、話しの内容は深刻であった。順平

は正直に、これまでの話しを綾子に打ち明けていた。
「順平君、私は、何処まで信じでよいかわからないわ」
「そうだろうな」
荒唐無稽に近い話しをしている。初めて聞いた綾子が訝しく思うのもわかるだけに、順平も苦笑いを浮かべるしかなかった。
神坂順平、悪い男ではない。いや、明るく闊達であるため、結構女子の間では人気もある。ただ、遊び好きである。
それほど綾子と順平の年齢は離れてない。綾子は短大卒で順平は大学を卒業している。その為に今の会社では綾子の方が、僅かに先輩にあたる。従って、入社当時から順平を知る綾子は良く、その金遣いの荒さを注意していた。
とにかく入社したての順平は、人当たりが良いせいか同僚の男友達も多く、会社帰りにはしょっちゅう酒を飲み歩き、週末ともなれば、やれ麻雀だゴルフだと男同士でワイワイ、ガヤガヤといつも集まって何かをしていた。そのために、お金に関しては、いつもオケラというのが入社当時からしばらく続いた順平の姿であった。

当時は良く綾子から借金をしていた。給料日には返すといって。ただ、律儀であった。給料が入れば、どんなに手持ちがなくても、きちんと返しにきた。もっとも貸したお金を一旦、手渡され、そこで拝み倒される事も、ままあったが。ただ、どんなに困っても順平は、綾子以外からは借りようとはしなかった。それは綾子も知っていた。だから、順平にはつい甘くなっていたのかも知れない。

さすがに三十近くになってくると、余裕ができたのか、あるいは金銭感覚が芽生えたのか、順平がお金を借りにくる事はなくなっていた。お金を貸すのは、楽しいものではない。しかし、それでも、順平が、全くお金を借りにこなくなると、それは、それで綾子にすると、少し寂しい気持ちにもなったものであった。

綾子との関係は、お金を借りなくなった今でも変わらない。年下でも姉さん的な存在。そんな綾子であるから、順平も自分をさらけ出せる。

綾子にしても、順平が嘘を話す男でないのは知っているが、余りに話しの内容が現実離れしているため戸惑いは隠せなかった。じっと綾子は順平の顔を見ていた。眉は太く、鼻筋も通っている。少し角張った顔つきはしているが、年を追う事に男らしい顔つきになっ

てきたと思った。
「はい、これが頼まれた五人をネットで調べた結果よ」といって綾子は、バックから数枚の印刷をした用紙を順平に渡した。
「ありがとう」
手にした印刷物に順平は目を通した。そこには自由建設党幹事長横島代議士、大丸代議士、警察庁金城次長、東京地検第二特捜部長東義彦検事など相当たる人物の名前があった。
「一人だけわからないわ。警視庁の佐田洋二郎という人はネットでは調べられなかったわ」
「そうか、おそらく、それほど高い役職ではないのだろう」
幾らネットが発達して情報が手軽に引き出せる時代とはいえ、現場などに勤務する人まで知るのは無理であった。警察関係者では、高木という男も調べられなかった。そうなると佐田という男も、また現場に近い人物となるのかも知れないと順平は思った。
「そう、これからどうするの」
「わからん。一つ判っているのは、そのうち俺は犯罪者に仕立て上げられる」
綾子が顔を曇らせ「滅多な事、いわないでよ」といった。

最初は元気そうに振る舞っていた順平であったが、さすがにしばらく振りに、親しい人と逢えた事で気がゆるんだのか、珍しく弱々しい顔を見せた。
順平は脳天気ともいえるくらい自由奔放な性格をしている。弱音を吐く姿は、日頃の順平からは尤も似つかわしくないものであった。それだけに、その姿に綾子はうずくような悲しみと不安を覚えた。
「これ、会社に頼みたい」
順平は、辞表とかかれた封筒を綾子に差し出した。
「本当に会社、やめるの」
「言ったろう。どっちみち追われるのは間違いない。これを見てくれ」
そう話すと順平はポケットを探り、皺になった銀行の残高証明書を取り出し綾子に見せた。
「……」
「これが全ての証明だ」
綾子の顔色は青ざめていた。

神々の代理戦争　試し読みでした。